

【研究ノート】

オルテガ研究の覚え書き（6）

藤 本 吉 藏

目 次

- I プロローグ
- II 『アインシュタインの理論の歴史的意義（El sentido historico de la teoria de Einstein）』の内容鳥瞰
 - 1. 絶対主義（Absolutismo）
 - 2. 遠近法主義（Perspectivism）
 - 3. 反ユートピア主義或いは反合理主義（Antiutopismo o antirracionalismo）
 - 4. 有限主義（Finitismo）
- III 『アインシュタインの理論の歴史的意義（El sentido historico de la teoria de Einstein）』の内容整理
- IV エピローグ

I プロローグ

本稿では、『オルテガ研究の覚え書き』(5)⁽¹⁾に引き続き、『現代の課題（El tema de nuestro tiempo）』への付録⁽²⁾を取り上げ、その内容把握及び付録としての意義を筆者なりに確認したいと思う。

これまで、つまり『覚え書き』(5)で当該付録数を三点と推断し、しかも紙幅や時間を勘案して、それらのうちから『革命の終焉（El ocaso de las revoluciones）』（以後、第一付録と略記する）及び『幻滅した精神に関するエピローグ（Eflogo sobre el alma desilusionada）』（以後、第二付録と略記する）の二点だけに的を絞って内容鳥瞰に努めてきた。構造的にみて、後者は前者へ

のエピローグと解し得た。また、「前書き」と10項目から成る本体『現代の課題 (El tema de nuestro tiempo)』⁽³⁾とそれら附録との内的関連を具体的に再確認するという意味合いを兼ねて、先ずその本体の核心を、特に各文献に散見される主要な語彙を基盤として内容を整理してきた是迄の『覚え書き』(4)や(5)の場合と異なり、文脈の流れに沿った内容を箇条書きすれば⁽⁴⁾、1. 自己の内奥の自発性を重視して、先行世代⁽⁵⁾から伝統的に何らの検討も無しに受け継いできた思想・価値・情操といった所有精神的領域における根本的な改革を急務とする現状(第1項目, 第5項目)⁽⁶⁾、2. 先行世代から相続した思想体系が当世代の固有の自発性と一致しなくなった原理を修正して自己内奥の感性との一致をもたらす (descendiésemos al propio corazón) という努力を怠っており、結果的に、何事にも怠惰で無感覚な雰囲気は政治や芸術の分野に充満している社会情勢(第2項目)、3. ヨーロッパ人が「文化の没落 (fracaso de la cultura)」と呼ぶ如き精神状態、言い換えれば、自分自身に忠実であれという義務を果たさず、現実的生の同意もなしに形式的空想に走る文化のユートピアニズムという病気を患い、生命力を失って硬直化している危篤状態(第5項目)、4. 昨日までの大きな目標が、未だそれに代わる新たな目標が完成に至っていないのに、もう光彩や権威を減じている如き生の根本的方向喪失、所謂科学・芸術・政治が我々の心情の全パースペクティブにおいてその価値を喪失している危機的現況(第9項目)等々、オルテガが診断した現代スペイン社会の疾患について羅列することができる。しかも次に、彼はその病を癒す処方箋の自覚と実践こそが現代に課せられた課題であると捉え、その為には、1. 生の発展の各段階には次の発展段階が内在しており、近接未来は主体たる我々から必然的に生まれるという自覚(第1項目, 第2項目)、2. 自己の心情の中へ沈潜し、その内部の種子 (germenes interiores) を発芽成長させ、それ自身の自発性 (espontaneidad) の型に応じて周囲の存在に形づくれという、孰の世代にも予め定められている歴史的命法の遂行(第2項目, 第5項目)⁽⁷⁾、3. 「主観的効用の側面＝生々しい歴史的現実」と「生の有為転変 (las vicissitudes) に無関係な客観的法則＝超生命的な純粹理性」という人間の内部に起こった分裂(第4項目, 第5項目)、

つまり生物的必然性と倫理的客観的支配に服する必然性とを併せ持つ人間の生現象を踏まえた上で、絶えず後者に基づいて生の意義や正当性を求めてきた過去の文化志向即ち理性に基づく合理的世界秩序の探求を巡り終えて(第3項目, 第4項目, 第6項目～第8項目), 生の自発性を再発見している現世代にとっては, 生の意義を生そのものから考察するという思惟方法の採用(第4項目, 第7項目)等々を肝要な事項として掲げ, 更に4. 理性と生とに関する真理探究の仕方は, 言い換えれば相対主義と理性主義という真理把握への真逆ヴェクトルは, 道徳や法律的規範, 芸術的感情や宗教的情緒といった精神的領域でも一般化される問題であり, 現代の課題の中核 (la raíz misma) へ我々を導くという見解(第3項目)⁽⁸⁾を披瀝している。これを為した暁には, 近接未来の思想を予見し, その一般的輪郭を描くことができるに違いないという確信に立ってのことである(第2項目)⁽⁹⁾。

扨て、『覚え書き』(5)で把捉した如く, 付録前二点では, 「定義することとは, 除外し否定すること (Definir es excluir y negar)」並びに「定義とは否定が示す肯定的性格乃至概念に他ならない」という見解に立って⁽¹⁰⁾, 或いは同一局面における真逆の2つのヴェクトルの共在を基点にして⁽¹¹⁾, 更にまた思考は視覚の働きによってだけでなくパースペクティヴの法則の下に置かれるという理念, 表現を変えれば, あらゆる個体は真理を理解する為のかけがえのない器官(unó órgano insustituible)であるという視座に基づいて, 論理を展開している。斯くしてそれらは, 既掲箇条書きに照らせば, 同次元の視座に立っての思索と解してもよからう。

ところで, 第一付録では, こうした志向で4つの省察工程を経て, 先の諸世代から無反省な合理主義的伝統の接受, その結果生じている生命力を失って硬直した社会通念, 生の自発性の無い文化のユートピアニズムによる一世風靡, という社会病弊を煩った当世代のスペイン人に対する警鐘乃至救済を念頭に置きつつ, 歴史的思流の必然的変遷を浮き彫りにしている⁽¹²⁾。更に第二付録では, 直近世代についての新たな展望を提示して, 本体『現代の課題 (El tema de nuestro tiempo)』という建造物に漆喰で補強する如き論説を展開しているもの

とみてとれる⁽¹³⁾。即ち付録二点では、「伝統主義的精神→『合理主義的精神＝幾何学的思考＝現前物との接触を無視するユートピアニズム＝純粹理性で貫かれた精神＝理念の使命と現実の生との合致が忘却されて生が理念に奉仕する精神＝感覚や感情的政治或いは宗教的伝統の権利に抗する政治的急進主義＝挫折を宿命とする革命的精神』⁽¹⁴⁾→「新たな精神的機構（オルテガでいう神秘主義体制）の誕生＝反革命の時代＝理念，制度，規範は生の為にあるという精神図式」という変遷について思索し⁽¹⁵⁾，且つそうした変遷は「あらゆる国民生活全体が通過する一般普遍段階の法則」であるという根幹を見て取れるのである⁽¹⁶⁾。斯くして付録二点は、『革命の終焉（El ocaso de las revoluciones）』及び『幻滅した精神に関するエピローグ（Eílogo sobre el alma desilusionada）』というタイトルを採るものの，一般でいう武力行使を伴った革命そのものの吟味を主要課題にしているというよりも，伝統主義的精神を覆して来た合理主義的精神態度つまり革命的精神⁽¹⁷⁾の挫折乃至終焉と，更にその後に来る新たな精神世界を予想する内容になっているといつてよい⁽¹⁸⁾。

扨て，本『覚え書き』で採り上げる付録は『アインシュタインの理論の歴史的意義（El sentido histórico de la teoría de Einstein）』（以後，第三附録と略記する）である。この付録は，構造的に見て，タイトルのない12文節の構造を持つ4つの段落（183-184）と，1.「絶対主義（absolutismo）」（184-187），2.「遠近法主義（Perspectivismo）」（187-191），3.「反ユートピア主義或いは反合理主義（Antiutopismo o antirracionalismo）」（191-196），4.「有限主義（Finitismo）」（196-198）から成る4つの章とで構成されている⁽¹⁹⁾。特に，その4つの段落に着目すれば，それは，この付録の中でオルテガが取り組もうとしている課題とその課題へのアプローチに関する姿勢を明らかにしているものと推察してもよいといえよう。言い換えれば，この付録の「序文」の役目を果たしているものと解し得るのである。というのは，それら段落を要約すれば，先ず，理論というものは，その真理性や虚偽性は別として，一つの魂，精神，意識（un alma, en un espíritu, en una conciencia）の中に生れる諸思想の集大成（un cuerpo de pensamientos）に他ならないと断じて，これから本作品で取り組む理論乃至主

義に対する視座を明らかにしている⁽²⁰⁾。次にそうした視点から、相対性理論 (la relatividad) の歴史的意義、歴史的現象としての意義を明らかにすれば、その独自性は、それを創造した精神のある特殊な諸傾向を示すという見解や、またこの偉大な科学的建造物は一人の人間の業績 (la obra) ではなく、諸精神の成果であるといえるが、そうした諸傾向が示す方法は、西洋歴史の流れを示しているものといった解釈を読み取ることができる⁽²¹⁾。但し、ここで彼オルテガは、この理論の勝利が人間精神に影響を与え、一定の進路を課すであろうといているのではないという点に注意を要する。寧ろその逆で、彼は、人間の精神が自発的に一定の進路をとったが為に、相対性理論は生まれ且つ勝利し得たものと解す立場に立っている。彼によれば、それは人間の歴史的な精神の中で生み出される深遠な変化の兆しなのである⁽²²⁾。それ故、そのことは、最近の数世紀間に亘って支配的であった感受性に拮抗する新感受性が眼前にはっきり見えるように、その理論の方向線を物理学の領域を超えて拡張して見れば十分に解るであろうと述べてこの箇所を閉じているのである⁽²³⁾。

Ⅱ 『アインシュタインの理論の歴史的意義 (El sentido historico de la teoria de Einstein)』の内容鳥瞰

本稿Ⅰ「プロローグ」で触れた如く、この付録では、「理論＝諸思想の集大成」、
「相対主義＝諸傾向が示す精神の成果」という視座の下に、四つの章で成り立っているが、順次それらの項目に従って読解作業に取りかかり、そこでは主に何が論じられているのかに焦点を当てて、その内容のあらましを俯瞰したいと思う。

1. 絶対主義 (Absolutismo)

この章は、一見タイトルからして、絶対主義との比較によるアインシュタイン相対主義についての吟味ではないのかという憶測を誘引しがちである。しかし文脈を辿っていくと、単純に両者が対峙し合うという思惟方法はとっていないことが明らかである。結論を先にいえば、合理主義乃至純粹理性から真理を

とりだす方式とは相容れないオルテガ独特の絶対主義を論じているのがここでの特徴といってよい。彼によれば、相対性という理念の中に、全体系の中核がある。それゆえ、その理論を十全的に把握する為の一切は、アインシュタインが労作の中で採っている相貌(*la fisonomía*)を理解することにかかってくる。この点さえ考慮すれば、この理論の自余の部分は単なる自由裁量に委ねることができるということになる。更に、ここでの論理展開に沿えば、古典力学(*la mecánica clásica*)は運動に関して我々が為すあらゆる決定の相対性を等しく認めている。それ故、我々の観察し得る空間や時間(*el espacio y el tiempo*)におけるあらゆる位置の相対性を認めているといってよい。とはいえ、オルテガは、アインシュタインの相対論はガリレイやニュートンのそれとは逆であると主張する。その解釈に従えば、彼らの場合、持続、位置、運動に関する経験的決定(*las determinaciones empíricas de duracion, colocación y movimiento*)は相対的なものであるが、それは、彼らが絶対的な空間、時間、運動の存在を信ずるが故にそうなのである。我々はそれらに直接に到達することはできない⁽¹⁾。例え、その存在を信ずる場合でも、現実到我々の所有する諸決定は全て単なる見せかけ上のもので、観察者の占めている比較点(*el punto de comparación*)に対し相対的な価値を持つに過ぎないものとなろう。それ故、こうした相対主義はここに欠陥を持っていると判断し得るが、ガリレイ或いはニュートンの物理学は、正にそうした意味において相対的なものである。もし、何らかの理由で、誰かが、空間、時間或いは運動において、達しがたい(*inasequible*)絶対的なものの存在を否定することはやむを得ないものと仮定すれば、絶対的な実在はもとより、絶対者と比較して相対的な実在も最早存在しないことになる。ただ単にそれだけの実在が存在することになると推定される。そしてこれが、実証物理学(*la física positiva*)が近似的(*aproximadamente*)に描写する対象に他ならない。しかしここでは、この実在は、観察者が自分の占める場所から知覚するところのものであり、それは相対的な一実在(*una realidad relativa*)であるとみてとれるが、この相対的な実在は、既述仮定の下では、存在するところの唯一のものであるから、相対的であると同時に、真の実在或いは同等に絶対的な実在で

もなければならぬといえよう。つまりここでは、相対主義は絶対主義と対立しないことになる。それどころか、相対主義は絶対主義と融合するし、決して我々の認識の欠陥を暗示するものではなく、却って後者に絶対的正当性を付与するといつてよい。オルテガにとって、アインシュタインの力学の真相はそのようなものである。この点について、彼が態々その物理学（アインシュタインの）は相対的なのではなく相対論的なのである（*Su física no es relativa, sino relativista, y merced a su relativismo consigue una significación absoluta.*）といっているのもその為であろう。そしてその相対主義のおかげで絶対的意味を獲得しているとみてとれるのである。斯くの如きオルテガ文脈を整理すると、古い相対主義においては、我々の知りたいもの（時間・空間の實在）が絶対的である故に、我々の認識は相対的であり、絶対的實在には達し得ない。アインシュタインの物理学からすれば、我々の認識は絶対的であり、實在は相対的なものである（*nuestro conocimiento es absoluto; la realidad es la relativa*）⁽²⁾。それ故、その新しい理論の真の特徴（*facciones*）の一つとして、認識の秩序（*ordenes*）におけるその絶対主義的傾向、つまり観察場所が何処であれ、物理学的諸法則は真である（*las leyes físicas son verdaderas*）という絶対主義的傾向は充分明白であるといつてよい。とはいっても、上述の新しい絶対主義は、最近の数世紀間、合理主義の精神を活気づけていたものとは根本的に相違する。合理主義者達は、自分の精神の内部にある永遠真理の探究だけによって事物の秘密を見つけるのが人間に与えられた驚くべき事柄であると信じていた。デカルトやニュートン然りである。彼らは経験からではなく純粋理性から真理をとり出す物理学を創始した。a priori な真理に基づく慣性の法則（*la ley de inercia*）はその範例に当たるといつてよい⁽³⁾。こうして、地球上の住人のこの特性が、合理主義によって全宇宙の一法則に高められた次第である。古い絶対主義者達は思想の秩序において、これと同様の素朴な誤りを犯している。彼らは、人間の過大評価から出発し、人間は宇宙の片隅の一存在者にすぎないのに、宇宙の中心に据える。オルテガに言わせると、アインシュタインの理論が訂正しようと意図した最も重大な誤謬はそのことであったと断じてよい。

2. 遠近法主義 (Perspectivism)

この章では、これまで展開してきたアインシュタインの思惟方法について、パースペクティブという概念と絡めて更に深く屢述している。それは、パースペクティブの理説が物理学を超えて全実在を包含し得る広さをもつという見解に立ってのことである。またアインシュタインの業績が主観主義への軌道、カント主義の確認とみる解釈がまかり通っていて、結果的に、彼の相対性理論が内蔵する真の意味が十分に理解されていない現状に対して不満を抱いてのことでもある⁽⁴⁾。先ず、オルテガは、他の作品における省察の場合と同様に厳格な証憑性を明示しているわけではないが⁽⁵⁾、事物の認識の仕方を二つに分けて説明している。即ち、一つは中心から離れた地方人の見方であり、他は中心の位置つまり首都に住む人の意識である。そこでの文節に従って詳細を辿れば、前者は、自分が中心からそれた位置から世界を見ているということを自覚していない。それどころか却って、自分は全世界の中心に居り、あらゆることに関する自己の直観は中心から為されたものと思ひ込む。そうした地方人の意見は、全て偽—中心 (un pseudo-centro) から発しているから、偽造されて生まれるというのである。これに反して後者は、自分の都市は大規模だが、宇宙の一点、言い換えれば、中心からそれた一隅 (un rincón excéntrico) に過ぎないのだということを知っている。しかも彼つまり後者は、世界には中心がなく、従って、我々自身の視点からあらゆるものを眺める以上、実在は特殊なパースペクティブしか提供しないのだという事実を考慮に入れて、如何なる判断においても、割り引く必要がある旨を心得ているとともに、大都市の人間がいつも懷疑主義者に映ってしまうことを自覚している。つまり、斯くの如く、意識次元の異なる二種の認識様式を強調して、後者こそが事実を一層よく捉えているものと結論づけつつ、この章での論理展開を開始しているのである。

扱て、オルテガは、こうした認識様式に関する想定の延長線上で、アインシュタイン理論に眼を向けている。文節に沿えば、アインシュタインの理論は、近代科学がその模範的な理説—ガリレイの「新科学 (nuova scienza)」、西洋における自然哲学—によって、ひどい地方的偏見 (provincianismo) を負っ

てきたことを暴露しようと試みたものである。また、G. F. B. リーマン (Georg Friedrich Bernhardt Riemann, 1826-1866) 長距離幾何学に基づいて、手近くにあるものだけに適用されるユークリッド幾何学を全宇宙に試みようとする認識様式の克服は、全ての地方的偏見の克服と同様に、克服者における著しい制限、謙虚な行為のおかげで果たされ得たといっただけよい⁽⁶⁾。アインシュタインにとって、「空間 (el espacio)」について語ることは、不可避的に誤謬に陥る誇大妄想狂 (una megalomanía) であると考えられた。我々は我々の測定するそれ以上の広がりについては何も知らないし、我々は我々の道具で測定する以上のものを測定することもできない。それら (諸装置) が我々の科学的視覚 (vision científica) の器官であって、我々の知る世界の空間的構造を決定する。しかし、地球上の他の場所から物理学の一体系を構成しようとするどの存在者も同様の事情にある故に、結局、その制限も真の制限ではないということになる。だからそこでは、真理は一定の主観に対してのみ真理であるという、主観主義的解釈への逆戻りが主張されているのではない。相対性理論に従えば、この地球上の視点からは時間的に出来事 B に先行する出来事 A も、宇宙の他の場所、例えばシリウス星 (Sirio) からは B に後続するように見える。これほど完全な実在の転倒はないであろう。それは、どちらかが誤っているということではない。逆に言えばそれは、実在がそれ固有の諸性質の一つとしてパースペクティブを内包しているということ、即ち異なった諸点から見られ得るように様々な仕方で組織されているということなのである。ここでいう空間と時間は、物理学的パースペクティブの客観的成分なのであって、視点に依存して変化するのは当然である (Espacio y tiempo son los ingredientes objetivos de la perspectiva física, y es natural que varíen según el punto de vista.) といっただけよい⁽⁷⁾。

ところで、オルテガは、こうした視点を踏まえた上で、パースペクティブについての概念を整理している。即ち、彼でいうパースペクティブとは、実在を観察する人に対して実在がとる秩序であり形式である (La perspectiva es el orden y forma que la realidad toma para el que la contempla.)。観察者の占める場所が変わればパースペクティブもまた変わる。しかし観察者が同じ場所で他の

人と交替する場合には、それは常に同一である。もし、実在がそれに現れる観察主観が存しないなら、パースペクティブも存しないことは確かである。そこで、もしそうなら、パースペクティブは主観的であるということではないのかという問いが提起されようが、オルテガにいわせると、そう問われるところに、少なくとも最近二世紀間に亘って全哲学を偏向させ、宇宙に対する人間の態度を誤らした概念の曖昧さがあるといつてよい⁽⁸⁾。斯くして、ある実在が意識主観(sujeto consciente)と我々が称している対象にぶつかると、実在はその主観に対し、それに現象することによって反応する。現象は実在者の客観的性質であり、主観に対する応答である。この応答は観察者の条件によって、例えばその見る場所によって相違する。斯くして、主観が実在に強要する変形(deformaciones)であると従来考えられてきたパースペクティブや視点が、今や客観的価値を取得するに至ることが注目されねばならない。時間や空間が主観の形式であると捉えるカント哲学者の命題に反して、実在者の形式へと立ち戻るべきである。ガリレイやニュートンが絶対空間(el espacio absoluto)について話す場合にしても、それは、何一つ具体性をもたない視点から眺められた空間を語るときに考えたことなのである。ニュートンは、その絶対空間を神の感官(sensorium Dei)、神の視覚器官(el órgano visual de Dios)と呼んだ。我々はそれを神のパースペクティブとすることができるかもしれない。しかし我々は、排他的且つ特定の場所を持たないような、矛盾した不条理な性質が何一つ存しないような、そうしたパースペクティブの理念は恐らく最後まで考えつかない。絶対的パースペクティブは存在しない為、絶対空間は存在しない(No hay un espacio absoluto porque no hay una perspectiva absoluta)。絶対的である為には、空間は、実在的であることを止め言い換えれば諸事物で満たされた空間であることを止め、抽象的概念にならなければならない。アインシュタイン理論における立証は、あらゆる視点の調和的多様性の正当化であった。もしその理念が道徳や芸術にまで拡大されるならば、我々は歴史や生を感じさせる為の新しい流儀(una manera)を持つことになろうと推定してもよい仕組みなのである。斯くしてオルテガは、この項目を締めくくるに当たり、何世紀間

も説かれてきた、永遠の相の下での事物の直観（visión de las cosas sub specie aeternitatis）というような、永遠性に立脚する視点は、盲目である（el punto de vista de la eternidad es ciego.）と主張する。それは何も見ないし、またそれは現存しないことを意味すると断じている。そして今後、人は寧ろ個性を表わす単人称の命法（al imperativo unipersonal）に忠実であるように努めるであろうし、諸国民についてもそのことは同様であると予測しているのである。

3. 反ユートピア主義或いは反合理主義（Antiutopismo o antirracionalismo）

この項目は、反ユートピア主義或いは反合理主義の立場から、前項に引き続きアインシュタインが描く相対性理論についての吟味に当たっている。文節を辿れば、先ず、積極的な形でパースペクティヴィズムに連なる傾向は、消極的な形からみればユートピア主義に対する反抗を意味するという見解でその作業の口火を切っている。オルテガにとって、ユートピア的概念は、場所を持たないところから造られたもので、あらゆる人に妥当するとの主張を特徴とする。相対性理論にはっきりみられる感性にとって、場所の特定化に対する拒否というこのような強情さは、傲慢に思われるに相違ない。宇宙の観察において、一定の場所をとらないような観察者は存しないし、あるものをみようとし且つそれを適切な位地から見ようとししないことは不条理である。ユートピア的性向（la propensión utópica）が全近代を通じてヨーロッパ人の精神、即ち科学・道徳・宗教や芸術を支配してきた。この点に鑑みてオルテガは、西欧文明が巨大な失敗に終わらない為には、ヨーロッパ人に特徴的な、現実在を支配しようとの途方もない熱望に対置するあらゆる平衡重り（el contrapeso）が必要だったと考える。というのは、彼オルテガにとって、ユートピア主義は、現前する問題をそれが現れている通りに受け取らないで、即座に、a priori に、勝手な形式をその問題に押しつけるという全く手に負えないところがあるからである⁽⁹⁾。更に文節を辿れば、人間知性のユートピア的逸脱（la desviación utopista）は、ギリシャに始まっている。そしてそれは、合理主義（理性主義）が激しくなるときには何処でも生じている。合理主義者は、純粹理性が真の実在であるという

信念の下に、それ(理性)が現実のもの(*la efectiva*)に取って代わるべきであるという狂信性を持って、典型的な世界つまり物理学的な或いは政治学的な世界を構成すべきと望む。彼らにあっては、事物と純粹觀念との対立は避け得ないものであり、その闘争は現実的なものの屈服に終わると信じて疑わない。この確信こそが彼らの気質の特徴である。しかし、そうであっても、諸觀念の攻撃に抵抗するに足る強さ(*la dureza*)を現実在が所有していることは明白である。そこで合理主義者は、理念の実現を無限の過程(*un proceso infinito*)の中で達成し得るという逃げ道を捜すに至る。ライプニッツやカント然りであり、進化論者ダーウインも同じ立場である⁽¹⁰⁾。特に、ここでの文節に従ってカントに目を向ければ、彼の仕事においては、経験は感覚によって伝達される与件(*el dato*)の単なる集積だけではなく、二つの要因の成果でもあるという偉大な発見をした。そこでは、感性的与件(*el dato sentidos*)は一つの配置体系の中に(*en un sistema de ordenación*)再び受け入れられ、編成され、整理されねばならない。しかしその秩序は、主観から供給され、*a priori*であるというのである。別の形式でいえば、物理学的経験は観察と幾何学によって構成されるということである。その幾何学は純粹理性によって作られた方眼(*una cuadrícula*)であり、観察は感覚の作業である。物質現象に関する全ての説明科学は、この両成文を、常に含んでいたし、含んでいるし、含むであろう。けれども、オルテガにいわせると、近代物理学がその歴史を一貫して明示してきた構成の同一性も、その精神の最深部の諸変容は拒否していない。実際、両成分間の相互関係は、非常に異なる諸解釈を導くといえる。

扱て、オルテガは、両者即ち感覚と幾何学とのいずれが他方に服従すべきか、観察が幾何学の要求に服すべきか或いはその逆かを問い、そのいずれかを決定することは、知的傾向の対立する二つのタイプのどちらか一方に我々を所属せしめることに他ならないと考える。つまり唯一同一の物理学の中に相反する二つの人間タイプが入ることになると推断している⁽¹¹⁾。そして彼は、実際その鋭いジレンマにおいて、H. A. ローレンツ(Hendrik Antoon Lorentz, 1852-1928)とアインシュタインは同じ実験に臨みながら、相反する解答を導

いたと指摘する。前者は、この点に関して、古い合理主義の立場を堅持しつつ、屈服し且つちぢまる (cede y se contrae) のは、観察・事実・質量であると結論づけた。「ローレンツ短縮 (contracción de Lorentz)」はユートピアニズムの範例といってよい⁽¹²⁾。反対に後者は、幾何学の方が屈服すべきであり、純粋空間は観察に従い、それにひれ伏すべきであると解いた。更にオルテガは、こうした特性つまり解答が政治の領域に適用された場合を想定し、前者 H. A. ローレンツなら、そこに完全な相関関係のあることを前提にして諸原理が守られる限り諸国民は滅びないと主張するだろうし、後者アインシュタインは、原理は国民の為にあるのだから、我々は諸国民が救われるような諸原理を探求すべきであることを強調するだろうと推定している。

ところで、オルテガは、既成の方法に礼拝を捧げる科学的狂信から離脱して、斯くの如きアインシュタインの思想へ転身すると、これまでの「理性の命令 (los dictados de la razon)」という所謂幾何学的役割つまり純粋理性の役割に絶対的権威を置く姿勢からの方向転換を感じると強調する。彼の視点に沿えば、アインシュタインにとっての理性は、身分の低い道具になっている。顧みるに、ガリレイやニュートンは、理性の命令に従って単純にユークリッド的宇宙を作った。しかし純粋理性は配置の諸体系 (sistemas de ordenacion) を創案し得るだけであって、その他の事を成し得るものではない。その体系は数多く様々で、ユークリッド幾何学もその一つであり、G. F. B リーマンの幾何学、N. ロバチェフスキー (Nicolai Lobatchewski, 1792-1856) の幾何学等々がある。だが明らかに、現実的なものが如何に在るかを解決するのは、これらの体系言い換えれば純粋理性ではない。その反対に、現実在がそれらの可能な配置秩序 (órdenes posibles) 乃至それらの図式 (esquemas) から、自己に最も親近なものを選択するのであり、相対性理論の表明していることはそのことである。アインシュタインは、過去四世紀間に亘った合理主義に反対し、理性と観察の間に存在した古くからの関係を逆転した。彼の見解では、今や理性は命令的な規範であることをやめ、諸道具の倉庫 (arsenal) に変えられる。そして観察がそれらを検査して、使うのに都合のよい道具を決定するということになる。だか

ら、純粹觀念と純粹事實との相互選択の科学が生まれるに至ったといつてよい。オルテガは、この点がアインシュタインの思想において強調されるべき最も重要な一つであると解している。何故なら、生に対する全く新しい態度の開始をそこに見てとることができるからである。文化はこれまでのように、我々の生存が準拠すべき命法規範(*una norma imperativa*)となることをやめるであろうし、且つまた、いまや我々はもっと精巧な且つもっと公正な(*más delicada y más justa*)両者の関係を推測することができる。生の諸事象の中から、いくつかは、可能な文化形式として選ばれる。そして、それらの可能な文化形式のうちから、生は生として自己実現にもっとも必要なものだけを選び取るのである。

4. 有限主義 (Finitismo)

この省察の趣旨は、無限性を攻撃するアインシュタインの性向(*la tendencia*)に着目しながら、彼の相対性理論の特徴を浮き彫りにすることにある。特に、相対性理論に露出している深い諸性向のうちでも最も明白なものについて言及したいという意向を強く表明した上での論考作業である。先ず、オルテガは、アインシュタインの物理学が、空間・時間の無限性に訴えるという手法で全ての議論を整えようとしてきた過去の空想家と異なり、宇宙に境界を設ける⁽¹³⁾といった特徴を有すると捉えている。言い換えれば、彼アインシュタインが抱く世界は、曲率(*curvatura*)を持っており、それ故、閉ざされた(*cerrado*)有限な世界に他ならない⁽¹⁴⁾と解釈しているのである。

扱て、オルテガは、斯くの如き見解を披瀝した上で、こうした性向の革新は、諸事実に対して目と心を開きさえすれば、科学的理説が自然発生的に生ずると信じ込む人にとっては重要性を持たないであろうと推量する。何故なら、そうした革新は世界に着せられるのが常であった形式の単なる修正にすぎないとされるであろうからである。しかし、オルテガにいわせれば、そうした想定は間違っている。というのは、科学的理説というものは、それが依拠している事実がいかに明白に現れていようと、それへの精神の明確な指向(*una clara*

predisposición del espíritu) なしに生まれない⁽¹⁵⁾ といってよいのである。寧ろ、我々が探求しているもの以上の真理が発見されたりはしないし、探求していないものに対しては、その存在が明白であっても、精神は盲目のままでいるといってよかろう。しかもこのことは、物理学や数学が急に有限なものを非常に愛好し、無限なものに対して極めて冷淡になり始めたという事実の理解を大きく進めるであろうという推測さえも可能にする。

ところで、オルテガは、その文脈の流れで、ある人は宇宙には限界がないという観念に傾き、またある人は自分の周囲は限られた世界であると感受するが、この二つの心の相違ほど根本的な相違はないと強調する。彼の見解に従えば、宇宙を無限と捉える見方は、ルネッサンスにおいて生み出された⁽¹⁶⁾。更に、その宇宙風景の無限性は、全近代を通じて、西洋人の諸欲求の下に魔術的深み(un fondo mágico)として隠されていた。ところが、今や世界は限界あるものになった。土手で囲まれた果樹園、一つの部屋、或いは内地の如き世界となったのである。この新しい舞台は使い古してきたものとは全く違った生のスタイルを示唆しているとみてとれる。その有限主義(finitismo)の傾向には、制限への、毅然とした落ち着きへの、漠然たる最高級へ向けた反発への、反ロマンティズムへの明白な衝動がある。歴史を遡ってみれば、ギリシャ人、古典人(el clásico)もまた一つの限界付けられた宇宙の中で生きていた。ギリシャ人の文化は全て、無限なるものに怯え、常に節度(métron-μετρον)⁽¹⁷⁾を求めた。とはいえ、このことは、人間の心が一つの別の古典主義へ向かっていると信じ込むのは軽率である。オルテガにいわせると、従来の新古典主義は全て軽薄なものに終わっている。彼ら(古典人)は限界を求めたが、無限な(限界なき)世界に決して生きたことがなかったからである。我々の場合は逆である。我々にとって、限界は切断を意味する。今我々が生きようとしているこの閉ざされた世界即ち有限の世界は、手の下しようのない、宇宙の一つの切り株(un muñón de universo.)なのである⁽¹⁸⁾。

Ⅲ 『アインシュタインの理論の歴史的意義 (El sentido historico de la teoria de Einstein)』の内容整理

是迄、当該『第三付録』について、その「前書き」の役割と解し得る4つの段落、及び4つの章で成る本文内容について、特に文節の流れそのままに拘りながら主に何が叙述されているのかを中心に鳥瞰してきた。それは、結論的に先取りしていえば、第一章から第四章まで、一貫して、合理主義(理性主義)或いは自己自身を宇宙の中心に据えて事物把握に取り掛かる旧い絶対主義者の方針とは相容れない相対主義を基盤とした真理探究の重要性を省察したもののといってもよいものであった。特に、第一章では、相対主義という理念の中に全体系の中枢があるという見解を下に、相対主義と絶対主義とが融合するというオルテガ独特の絶対主義を表明し、第二章では、物理学を超えて全実在を包含し得る広さを持つ或いは実在を観察する人に対して実在が採る秩序とオルテガが意味づけるパースペクティブの理説と絡めつつ、第三章では、全近代を通じて支配してきたヨーロッパ人の精神言い換えれば西欧文明が挫折へ直面する気質について吟味しながら、反ユートピア主義或いは反合理主義の立場に立って、第四章では、世界は曲率を持っており、故に閉ざされた有限な世界に他ならないという視座から、当時の無限性を攻撃するという特徴を明示することで、アインシュタイン相対論の性向 (la propension) や力学の真髓を浮き彫りにしている。それは、世界についての把握を、経験からではなく自己の精神内部言い換えれば唯ひたすら a priori な純粹理性を拠り所にするという柔軟性を欠いた頑ななヨーロッパ精神へ polemick を放ったことである。当然この姿勢は、本体『現代の課題 (El tema de nuestro tiempo)』へ附した『付録』という意味合いからして、前者『現代の課題』第1項目、第2項目・第5項目・第9項目でオルテガが診断した当時のスペイン社会に蔓延る病魔、言い換えればヨーロッパ人が「文化の没落」と呼ぶ如き精神疾患を煩って生命力を失い、怠惰で無感覚な硬直化した社会情勢、或いは我々の精神における方向喪失即ち科学・芸術・政治が我々の心情の全パースペクティブにおいて価値を喪失して

いる現況、を念頭に置いてのことといってもよいであろう⁽¹⁾。無論、オルテガが放つポレミックの基点が、『現代の課題』第Ⅰ項目～第Ⅴ項目、第Ⅶ項目で提示したスペイン社会病からの救済乃至脱却を目論む処方箋に着目すれば、即ち近接未来は主体たる我々の必然性から生まれるという自覚、或いは自己の心情の中に沈潜し、自己自身の自発性の型に応じて周囲の存在に形作れという歴史的命法の遂行、生の意義を生そのものから考察するという思惟方法の採用を重視していることに鑑みれば⁽²⁾、真理は一定の主観に対してのみ真理であるという主知主義 (Intellectualismus) を採るものではないことは確かである。つまりオルテガは、『現代の課題』、『第一付録』や『第二付録』の場合と同様の態度で『第三附録』でも、一切の懷疑から全ての確実性を導く普遍の規則を帰結する、言い換えれば、全ての先入見を捨てて、一切のものがその上に構築されるべき根本的な基礎を発見する方法の構築を図るデカルトの懷疑及びゴギト⁽³⁾、魂は元々多くの概念や知識の諸原理を有し、外界の対象が機会に応じてのみ、それらから呼び起こす、つまり真理の証明は生得的と呼ばれる内的諸原理にしか由来し得ないと主張するライプニッツの生得的認識主観或いは窓がないモナド⁽⁴⁾、空間と時間とは主観的なものであり、それらは我々の知覚に付与されている装備の一部であるという見解、視点を変えていえば、外部の世界は感覚の素材を生じさせるに過ぎず、我々自身の精神の装備がその素材を空間と時間の中に秩序づけ且つ我々はそれによって経験を理解する様々な概念を提供するという視座に立つカントの時間空間理念⁽⁵⁾を踏襲しないのである⁽⁶⁾。

扱て、オルテガは、論理展開を図る上で、先ず、落体の法則 (Gesetz der fallenden Körper)、慣性の法則 (das Trägheitsgesetz) を提唱したガリレイ⁽⁷⁾やそれら法則を定式化したニュートンを、言い換えれば量子力学的な新しいスタイルの自然法則が登場する前に風靡していた古典力学を登場させている。それは、我々が直接到達できない絶対空間 (der absolute Raum) 並びに絶対時間 (die absolute Zeit) という実在設定とそれらに向けてのあらゆる相対的な認識を基幹とする古典力学の相対性原理 (Bewegung im Raum) の特徴を提示する為である⁽⁸⁾。特に、ここで注意を要するのは、オルテガが1933年に行った講演録

『ガリレオをめぐる (En Torno a Galileo)』からも察し得るように⁽⁹⁾、ガリレイ (ニュートンも含め) が為した自然の数学的理念化言い換えれば空間時間的諸形態一般の純粋数学化に他ならない「純粋幾何学化 (reine Geometrie)」を原因として発生した a priori な理念と経験との交替が西欧文明の危機の源泉であると憂いたフッサールの如く⁽¹⁰⁾、現代文明にみる「危機の図式 Esquem de las crisis)」に潜むガリレイの姿をみている点である。つまり彼オルテガは、その講演録のなかで、ガリレイを近代の始まり、正に彼の足下から現代まで歴史的土壌を支配してきた諸観念 (合理主義)、諸価値、様々な衝動の体系の始まりと捉え、しかも更に、それら近代を形成する原理つまり「生に対する意義を喪失した」⁽¹¹⁾自然の数学化の志向は、現世代へ最早妥当せずに関わりをつけ、別の歴史的境界へ、別の存在様式へと新たな脱出開始を告げる深刻な歴史的危機を推定させる動機が蠢いているという状況について⁽¹²⁾屢述している。斯くして、オルテガによる合理主義的なスペインの社会疾患という見解の深層には、疑いなくこうしたガリレイ的な自然観が鎮座しているものと推断し得るのである。それ故にこそ、オルテガは、ここにアインシュタインを登場させ、古典力学的視点を逆転させて「人間の認識秩序 (ordenes) = 絶対的、実在 = 相対的な位置と相対的な運動」という見解を採り、絶対的時間という偏見の除去に有効な光エーテル (die Lichtäther) 及び電磁気現象 (die elektromagnetischer Phänomene) を考慮に入れて理論立てた彼の相対性の世界が明示する意義を浮かび上がらせようと目論んでいるといってもよからう⁽¹³⁾。結果的にそれは、観察場所が何処であれ物理学諸法則は真であるという認識の絶対主義的傾向を提示し、延いてはオルテガのパースペクティヴ論へ連関する展開に至ると推量し得るのである。

ところで、オルテガはこの論理展開の流れに沿って、G. F. B. リーマン長距離幾何学と「永遠の相の下で (sub specie aeternitatis)」の思惟方法を採用あげている。即ち、G. F. B. リーマン長距離幾何学による「ユークリッド幾何学 = オルテガでいう地方的幾何学 (geometría de lo próximo)」⁽¹⁴⁾の克服、言い換えればユークリッド空間を一つの空間に過ぎないものと捉える G.

F. B. リーマン幾何学的な n 次元超空間という開かれた多様体 (Riemannschen Mannigfaltigkeiten)⁽¹⁵⁾ を重視し、また「実体 (substantia) の顕現 = 個物たる様態 (modi)」という視座で構築したスピノザ思惟方法を彷彿させる如き時空を越えた「永遠の相の下での事物の直観 (visión de las cosas sub specie aeternitatis)」⁽¹⁶⁾ という閉じられた志向を排斥している。こうした重視や排斥という姿勢で、アインシュタイン的相対性を基盤としたパースペクティブ論を省察し、それは実在を観察する人に対して実在がとる秩序であり形式であると定義づけ、斯くして、主観が実在に強要する変形 (deformacion) であると従来考えられてきたパースペクティブが、今や客観的価値を取得するに至ると表明している。アインシュタイン理論における相対的立証が、あらゆる視点の調和的多様性の正当化であると解釈した上でのことである。

扱て、次なる論理段階では、ガリレイ、カント、ダーウィン、H. A. ローレンツ、アインシュタインとパースペクティブとの関連を課題としている。それは、文明や世代論を “palabra clave” とした『第一付録』や『第二付録』の場合と異なり、相対論的視座から為す「パースペクティブ = 反ユートピア主義乃至反合理主義」或いは「純粹理性こそが真の実在という信念 = 合理主義乃至ユートピアニズム = 終わりのなき過程での信念の達成 = ダーウィンの進化論」という等置についての論理展開である。取り分けカントは、物理学的経験が「観察 = 感覚の作業」と「幾何学 = 純粹理性によって作られた方眼 (una cuadrícula)」とから成る二つの要因の成果であることを発見したが、それら要因の内のどちらを優先させるべきか、という問題が浮かび上がってくる。そして、オルテガは、そのジレンマの中に、H. A. ローレンツとアインシュタインを登場させる。前者は、観察の方が服すべきであるとみなして古い合理主義の立場を堅持した。物体が運動しているとき、運動方向の長さは、静止している時の長さに比べ縮むと解いた「ローレンツ収縮 (contracción de Lorentz)」⁽¹⁷⁾ はユートピアニズムの範例といてよい。それとは逆に、後者は幾何学が平伏すべきであると強調した。そして彼は、ローレンツ収縮に対して、全ての物理法則がどのような慣性系を基準にとっても同じ形式で表されると主張するのである⁽¹⁸⁾。ガリレイやニュート

ンにしても、理性の命令に従って単純にユークリッド的宇宙を作ったが、純粹理性は配置の諸体系 (sistemas de ordenacion) を創案し得るだけであり、現実的なものが如何に在るかを解決できない。反対に現實在こそが、それらの可能な配置秩序 (órdenes posibles) 乃至それらの図式 (esquemas) から、自己に最も親近なものを選択するのであり、アインシュタインの相対性理論が表明しているのはそのことに他ならない。オルテガは、生に対する全く新しい態度の開始をそこに見ているのである。

扱て、最後に、無限性を攻撃するアインシュタインの性向をクローズアップする事で、彼の相対性理論の特徴を更に浮き彫りにし、この『附録』の論理展開を閉じている。オルテガは、アインシュタインの物理学は、宇宙に境界を設ける、言い換えれば曲率を持った閉ざされた有限な世界を描いているものと解している。そもそも、曲率は計量係数が場所場所での様になるかに依存している⁽¹⁹⁾。時空の曲率においても、空間における物質の存在によって決定され、物質の分布から計算される。オルテガは、こうしたアインシュタインにおける有限主義の傾向 (finitismo) は、ルネッサンスから全近代を通じて宇宙を無限と解してきた流れに抗し、全く違った生のスタイルを想起せしめるものと推量している。取りも直さず、それは制限への、毅然とした落ち着きへの、漠然たる最高級へ向けた反発への、反ロマンティズムへの明白な衝動に他ならない。我々にとって、限界は切断、宇宙の一つの切り株 (un muñón de universo.) なのである。

IV エピローグ

本稿『覚え書き』は、オルテガ研究継続の一環として取り組んだ「研究ノート」である。特に、プロローグでも触れた如く、前『覚え書き』(5) に引き続き『現代の課題 (El tema de nuestro tiempo)』(1923) への付録を採り上げ、その内容鳥瞰を目的としたものである。作業工程としては、先ず、本体である『現代の課題』の内容を再確認する為、そこでの主要課題即ちスペインに蔓延る社

会疾患とその処方箋を簡条書で整理した。その場合、特に注意したのは、無論、是迄と同様に、フッサールの研究姿勢やI.ウォーラーステイン（Immanuel Wallerstein）が主張する“unthinking”を心掛けるスタンスは堅持するが、オルテガ研究にとっては甚だ浅はかで愚かな研究態度、つまり科学的分析を念頭にスピノザ的思惟方法（定義や公理を基盤とした追求）でオルテガの文献に当たることを止めることである⁽¹⁾。吐露すれば、既にこの中止は『覚え書き』（4）から心掛けてはきているが、本稿ではこのアプローチを全面的にきっぱりと捨てた次第である。また、オルテガ文献に屢々散見される特殊な語彙を“la palabra clave”として内容を俯瞰する態度も極力戒め、文節の流れそのままに内容全体を読解することに努めた。

扨て、次の作業工程として、社会科学と物理学の関連についての解釈に窮しながら、『現代の課題（El tema de nuestro tiempo）』と『付録』とが織りなす諸要素を整理してきた。その折、是迄の『覚え書き』でも、適宜、指摘してきたように、オルテガ文献では登場する諸思想家や引用文献についての明確な典拠が示されていないという問題があり、更にそれに加えて、特に本稿では難解な多くの物理学的専門用語に直面して執筆の中断を余儀なくされた。そうした困難から脱出する為に、屢々W.パウリ（Wolfgang Pauli）やM.ボルン（Max Born）の文献を参考にさせて頂いたが、当該箇所については説明不足というご叱責を賜るのではないのかと反省している。

ところで、本『付録』の意義について整理すれば、それは、長らく継承してきたガリレイやニュートン流の自然の数学化乃至デカルトやカントの合理主義（理性主義）がもたらした現実的生の価値喪失を、スペイン社会疾患の深層に蔓延る源泉として明確に提示したことである。また、その救済（salvaciones）の為の処方箋として、パースペクティヴをアインシュタイン相対論との絡みで科学的に体系づけ、存在する総てのものを存在者と存在の関係に還元するという立場で、理性に対する生の復権をもたらす世界を描き出して見せたことである。その社会疾患や対処療法については、『ドン・キホーテに関する省察（Meditaciones del Quijote）』や『現代の課題（El tema de nuestro tiempo）』に

共通して流れている主題として読み取ることができる⁽²⁾。しかし、それら作品では、あまりにも想念的色彩が強い論説になっている故、内容を敷衍する意味でより具体的且つ体系的な内容補足が必要と思われるが、この問題に相應する役目をこの『付録』が担っているものと解し得るのである。正にここにおいてこそ、「私は私と私の環境である。私がもし私の環境を救わなければ、私自身を救わないことになる (yo soy yo y mi circunstancia, y si no la salvo a ella no me salvo yo.)」⁽³⁾或いは「人間は自分を取り巻く環境についての十分な認識を得たとき、その能力の最大限を発揮する。それらの環境を通して、世界と交わるのである (El hombre rinde el maximum de su capacidad cuando adquiere la la plena conciencia de sus circunstancias. Por ella comunica con el universo)」⁽⁴⁾という命題がより明瞭に浮かび上がってくるといってもよいと思えるのである。

注

文献として

Colección 版; Ortega y Gasset, Obras de José Ortega y Gasset, Colección editata por Paulino Garagorri, Revista de Occidente, en Alianza Editorial, 2003. O. C. 版; José Ortega y Gasset, Obras Completas, Alianza Editorial, Revista de Occidente, Madrid, 1983. Tomo III. Taurus 版; José Ortega y Gasset, Obras Completas, Tomo III, Santllana Ediciones Generales, S. L. y Fundación José Ortega y Gasset, Juan Pablo Fusi Aizpurúa, Taurus, 2005. 白水社版; 『オルテガ著作集』I, 白水社 1977 年。を用いたが、主要文献とした Colección 版(16)のページ数だけを提示する。

I プロローグ

- (1) 拙著「オルテガ研究の覚え書き」(5), 『政治研究』第 5 号, 国士舘大学政経学部 附属政治研究所, 平成 26 年(以後, 本文並びに注記では, 『覚え書き』(5) と略記する)なお, 拙著「オルテガ研究の覚え書き」は, 他に第 1 号(平成 22 年), 第 2 号(平成 23 年), 第 3 号(平成 24 年), 第 4 号(平成 25 年)があり, 同様の様式で記載する。
- (2) 無論, 『現代の課題 (El tema de nuestro tiempo)』には, 版によっては異なるタ

イトルの附録 (apéndices) や追加稿 (anejos) が付録として組まれていることは十二分に承知しているが、筆者としては三点だけを付録として取り扱うことにする。この点については『覚え書き』(5)、153 ページを参照せよ。なお、他の作品はオルテガ理論についての十全な読解の為の資料として別の機会に、適宜、取り上げる所存である。

- (3) 即ち、この作品は、「前書き」73 と 1. 世代の概念 (La idea de las generaciones) 75-81, 2. 未来の予見 (La prevision del futuro) 82-89, 3. 相対主義と理性主義 (Relativismo y racionalismo) 90-97, 4. 文化と生 (Cultura y vida) 98-105, 5. 二重の命法 (El doble imperativr) 106-111, 6. 二つのアイロニー或いはソクラテスとドン・ファン (Las dos ironias, o Socrates y Don Juan) 112-118, 7. 生の評価 (Las valoraciones de la vida) 119-128, 8. 生の価値 (Valores vitales) 129-136, 9. 新しい兆候 (Nuevos síntomas) 137-143, 10. 視点の理説 (La doctrina del punto de vista) 144-152 等のタイトルで成る 10 項目とで構成されている。なお、項目に当てた日本語は白水社版に倣った。また、各項目に付した数字は Colección 16 のページ数である。
- (4) つまり、「使命」乃至「召明」, 「否定」乃至「排除」, 「パースペクティヴ」といった特別な語彙を “palabra clave” として論述を展開した場合と異なった形式においてである。
- (5) 世代とは、大衆と個人との動態的な妥協体であり、歴史が展開する蝶番である (La generación es compromiso dinámico entre masa e individuo)。Colección 16, p.79 (なお, “es” を解釈上筆者が挿入した)。『覚え書き』(4), 143 ページ。
- (6) () で示した項目及びその番号は、『現代の課題 (El tema de nuestro tiempo)』を構成している章である。
- (7) この見解は、孰の生乃至歴史も予め定められた軌道を持つ事実の総体であるといオルテガ独特の視点に裏打ちされている。El tema de nuestro tiempo, 2. La prevision del futuro., Colección 16, pp.82-83, 106-111. 『覚え書き』(4), 144, 149-150 ページ。

ところで、オルテガ見解に従えば、我々は二重の系列の命法、つまり文化の命法と生の命法によって支配されている。前者では、人は善良であるべきという命法であり、後者では善は人間的なもの即ち善は生と両立し、人は生に必然的でなければならないという命法である。だから、人は相互に制限し合い、修正し合っ
て二つの要請にかかわらねばならない。従って、我々の諸活動は二重の系列の命法によって統制されることが必要である。例えば、思考 (sentimiento)・意思

- (voluntad)・感情 (pensamiento) を統制する二重系列の命法を示せば、文化的命法 (cultural imperativo) としては真 (verdad)・善 (bondad)・美 (belleza), また生命的命法 (vital imperativo) としては誠実 (sinceridad)・衝動 (impetuosidad)・満足 (deleite) と描くことができる。Colección 16, p.109.『覚え書き』(4), 注Ⅱ (23), 172 ページ。
- (8) オルテガは、今日始まりつつある時代の感性こそは、精神的機能或いは文化的機能が同時に生的機能であることを肝に銘じて、どちらの陣営にも拘泥することなく、このジレンマを回避するという方向を目指しているところにその特徴があるとみている (第3項目～第6項目), 『覚え書き』(4), 145-153 ページ。Colección 16, pp.90-118.
- (9) Colección 16. El tema de nuestro riempo, 2. La prevision del future. p.84. 『覚え書き』(4), 144 ページ。
- (10) 『覚え書き』(5), 156-158 ページ。Colección 16, pp.153-154.
- (11) 言い換えれば、同一社会情勢における通念堅持とそれに対する否定乃至反抗の繁茂、先行時代における慣習の継承や醸成と同時にそれへの拒絶感情の共在、「伝統主義的精神態度の円熟期＝歴史的な最高潮」と「最早個体の内的感情や生活で満足しない拡張の時期＝新たな精神態度蓄衍への径動」との同時顕在といった二極ヴェクトルの共在という見解である。『覚え書き』(5), 159-168 ページ。Colección 16, pp.160-161, 171-175.
- (12) 『覚え書き』(5), 第1作業工程 (156-159 ページ。Colección 16, 153-160.), 第2作業工程 (159-164 ページ。Colección 16, 160-171.), 第3作業工程 (164-165 ページ。Colección 16, 171-177.), 第4作業工程 (165-167 ページ。Colección 16, 177-180.)。作業工程ごとの整理は筆者によるもので、原文にはない。
- (13) 『覚え書き』(5), 167-169 ページ。Colección 16, pp.180-182.
- (14) 『覚え書き』(5), 157-163, 173 ページ。Colección 16, pp.160-171. なお、ここでは特に、個人主義的精神態度、ガリレオやデカルトの力学を念頭に置いている。
- (15) 『覚え書き』(5), 165-169 ページ。Colección 16, pp.177-182.
- (16) 『覚え書き』(5), 167-169 ページ。Colección 16, p.180.
- (17) ここでのオルテガは、「国家権力乃至既定の権力に対して暴力を使用する全ての集団的運動 (todo movimiento colectivo) を革命と解釈する立場を拒絶」→「革命における暴力は非本質的な要因」→「革命の根源は精神である＝革命は、バリケードではなく、頭脳の、精神の紛れ様のなく明らかな性向を前提とする」という等置を念頭に置いている。『覚え書き』(5), 173 ページ。

- (18) 『幻滅した精神』の主要な論考の内容を為している。
- (19) 各項目の日本語訳は白水社版に倣った。項目につけた数字は Colección 版 16. のページ数である。
- (20) Colección 16, p.183.
- (21) Colección 16, pp.183-184.
- (22) Colección 16, p.184.
- (23) Colección 16, p.184.

II 『アインシュタインの理論の歴史的意義 (El sentido historico de la teoria de Einstein)』の内容鳥瞰

1. 絶対主義 (Absolutismo)

- (1) 例えば, "las fuerzas centrifugas" にである。Colección 16, p.185.
- (2) オルテガは, 新しい力学を古い哲学的相対主義の子孫とみることは不条理であるとみる。Colección 16, p.185.
- (3) ここで, オルテガは "...según ella (la ley de inercia), un cuerpo libre de todo influjo, si se mueve, se moverá indefinidamente en sentido rectilíneo y uniforme. Por que tal afirmacion? Sencillamente porque el espacio tiene una estructura rectilínea, euclidiana, y en consecuencia, todo movimiento espontaneo que no está desviado por alguna fuerza se acomodara a la ley del espacio. (Colección 16, pp.186-187.)" という説明を加えている。また "Pero esta índole euclidiana del espacio, ¿Quien la garantiza? ¿La experiencia? En modo alguno; la pura razon es la que, previamente a toda experiencia, resuelve sobre la absoluta necesidad de que el espacio en que se mueven los cuerpos fisicos sea euclidiano. El hombre no puede ver sino en el espacio euclidiano. (Colección 16, p.187.)" と自問自答している。

2. 遠近法主義 (Perspectivism)

- (4) 即ち, "Sin una sola excepción — que yo sepa —, cuanto se ha escrito sobre ella interpreta el gran desdichamiento como un paso más en el camino del subjetivismo. En todas las lenguas y en todos los giros se ha repetido que Einstein viene a confirmar la doctrina kantiana, por lo menos en un punto: la subjetividad de espacio y tiempo. Me importa declarar taxativamente que esta creencia la más cabal incomprensión del sentido..." と不満をもらしているのである。Colección 16, p.189.
- (5) 例えば, 1914 年の『ドン・キホーテに関する省察 (Meditaciones del Quijote)』のなかで, 適宜, オルテガの論述する教説は科学的確信に満ちたものであるが, 脚

注や証明という硬直した装置 (el mecánico) を用いて哲学的真理の追究を目論んだものを読者に提示しようとしているわけではないことわっている。この点については、『覚え書き』(1) pp.169, 174, 178., (2) pp.210-213., (3) p.196. を参照せよ。

- (6) ここでの難解な原文を示すと、オルテガは、"La geometría euclidiana, que solo es aplicable a lo cercano, era proyectada sobre el universo. Hoy se empieza en Alemania a llamar al sistema de Euclides 《geometría de lo próximo》, en oposición a otros cuerpos de axiomas que, como el de Riemann, son geometrías de largo alcance." という見解を述べている (Colección 16, p.118)。ちなみに、アインシュタインは、非ユークリッド幾何学としてのリーマン多様体たるリーマン幾何学 (曲面をユークリッド空間に縛り付けておく制限, 2千年もの間の拘束, を取り除いた) を数学的基礎として一般相対性理論を構築した。リワノフ『リーマンとアインシュタインの世界』松野 武, 山崎 昇訳, 東京図書, 1975 年, 24-46, 109-136, 138-144, 154 ページ (原点を手にできず, 訳本を使用する)。
- (7) "...exponía yo brevemente esta doctrina perspectivista, dándole una amplitud que trasciende de la física y abarca toda realidad." という一節を加えて、パースペクティヴについては、既に、『傍観者, 第1』(1916) の最初のところで簡単に触れていることを明らかにしている〔Véase《Verdad y perspectiva》, en El Espectador, tomo I.〕。なお、ここに "La primera publicación de Einstein sobre su reciente descubrimiento, Die Grundlagen der allgemeinen Relativitätstheorie, se publicó dentro de ese año." という注をも加えて、1916年にアインシュタインによる一般相対性理論に関する作品(初版)が発刊されたことを強調している。〔Nota de la tercera edición.〕 (Colección 16, p.189.)。
- (8) この点を更に明瞭且つ具体的に示す為に、単独に静止している玉突き台の玉と他の玉がそれに衝突する場合を想定し、前者つまり玉突き台の玉に弾性が存在することを例示して、"La elasticidad es una cualidad de la bola primera, no menos que su color y su forma; pero es una cualidad reactiva o de respuesta a la acción de otro objeto. Así, en el hombre lo que solemos llamar su carácter es su manera de reaccionar ante lo exterior – cosas, personas, sucesos." と断じている (Colección 16, p.190)。
3. 反ユートピア主義或いは反合理主義 (Antiutopismo o antirrationalism)
- (9) オルテガは "...el hombre de Oriente ha encontrado fórmulas de más perfecto ajuste con la realidad. 3En cambio, el europeo ha sido frívolo en la apreciación de los factores elementales de la vida se ha fraguado de ellos interpretaciones caprichosas que es forzoso periódicamente sustituir." と捕らえているのである (Colección 16, p.192)。

- (10) この後、段落をかえて、“No se comprende que la ciencia, cuyo único placer es conseguir una imagen certera de las cosas, pueda alimentarse de ilusiones.”といった見解を述べ、且つオルテガの思想形成に大きな影響を受けた事例として、諸向性 (los tropismos) についての生理学者ロエブの講義に関する読解を例示している。即ち “...!De modo-pensaba yo- (だから私は考えてみた) que un concepto como el tropismo, capaz apenas de penetrar el secreto de fenómenos tan sencillos como los broncos de los infusorios, puede bastar en un vago future para explicar cosa tan mistriosa y compleja como sos actos éticos del hombre! ...” と述べているのである (Colección 16, p.193)。
- (11) ここでマイケルソンの実験について触れ、“Sabido es que el experimento de Michelson tiene el rango de una expereincia crucial: en el se pone entre la espada y la pared al pensamiento del físico. La ley geométrica que proclama la homogeneidad inalterable del espacio, cualesquiera sean los procesos que en él se producen, entra en conflicto riguroso con la observación, con el hecho, con la material. Una de dos: o la material cede a la geometría, o ésta a aquélla.” と述べている (Colección 16, pp.194-195)。
- (12) オルテガはここで、“Es el Juramento del Juego de Pelota transportado a la física. (Colección 16, p.195.)” と述べている。この点については『覚え書き』(4), II『現代の課題 (El tema nuestro tiempo)』の内容鳥瞰, 注 (36), 173 ページを参照せよ。

4. 有限主義 (Finitismo)

- (13) ブローエル (L. E. J. Brouwer) やヴァイル (H. K. H. Weyl) の数学も然りである。Colección 16, p.196
- (14) オルテガはここに、“Por todas partes, en el sistema de Einstein, se persigue al infinito. Así, por ejemplo. Queda suprimida la posibilidad de velocidades infinitas.” という注を付して、アインシュタインが採る無限性への攻撃を補っている (Colección 16, p.196)。
- (15) つまり、オルテガに従えば、“Es preciso entender la génesis de nuestros pensamientos con toda su duplicada. No se descubren más verdades que las que de antemano se buscan. Las demás, por muy evidentes que sean, encuentran ciego al espritu.” というのである (Colección 16, p.197)。
- (16) ここでは、G.ブルーノ (Giordano Bruno) を念頭においている (Colección 16, p.197)。この点については、別の機会に詳述する予定である。
- (17) この訳は、白水社版に倣った (321 ページ)。

- (18) ここに "Otros dos puntos fuera necesario tocar para que las líneas generales de la mente que ha creado la teoría de la relatividad quedasen completas. Uno de ellos es el cuidado con que se subrayan las discontinuidades en lo real, frente al prurito de lo continuo que domina el pensamiento de los últimos siglos. Este discontinuismo triunfa a la par en biología y en historia. El otro punto, tal vez el más grave de todos, es la tendencia a suprimir la causalidad, que opera en forma latent dentro de la teoría de Einstein. La física, que comienza por ser mecánica y luego fue dinámica, tiende en Einstein a convertirse en mera cinematic. Sobre ambos puntos solo puede hablarse recurriendo a difíciles cuestiones técnicas, que en el texto he procurado eliminar." という長い注を記している (Colección 16, p.198)。

Ⅲ 『アインシュタインの理論の歴史的意義 (El sentido historico de la teoria de Einstein)』の内容整理

- (1) 本稿「Ⅰ プロローグ」2 ページ。
(2) 本稿「Ⅰ プロローグ」2-3 ページ。
(3) Recherche de la Vérité, p.523. Meditationes de Prima Philosophia, II. pp.26-27. Responsio ad secundas Objectiones, p.140. Discours de la Méthode, pp.32-33.
(4) Gottfried Wilhelm Leibniz, Sämtliche Schriften und Briefe, Sechste Reihe Phikosophische Schriften Sechster Band Nouveaux Essais, Herausgegeben von der Leibniz-Forschungsstelle der Universität Münster. Bearbeiter: André Robinet, Heinrich Schepers. Berlin. 1962, Epistemologia, S.5-7 (IL.Northwestern University Library 所収). Bertrand Russell, History of Western Philosophy, Routledge Classics, London, 2010, p.637. 尚, ライプニッツはこの見解を示す上で, J. Lock, An Essay concerning Human Understanting (1690) に対する批判の立場で "Epistomologia" を表しているが, ここでの論考過程上, この点については詳述しないことにする。
(5) Immanuel Kant, Kritik der Reinen Vernunft, suhrkamp, 1968, S.71-96.
(6) Bertrand Russell, *op. cit.*, p.646.
(7) ガリレイの作品は方法論の見解が作品ごとに変わっているのみならず, 同一書物の中ですら反目する内容を述べている。その為か, 彼の方法論について諸種の見解が存在する。例えば, プラトン主義者 (=ガリレオの力学対象は, 個の現実的空間における現実的物体の運動ではなく, 抽象的なユークリッド空間における理念的物体の運動である。自然の中にプラトンのイデアの理念化を行う), アリストテレス主義者 (ガリレオにはスコラのアリストテレスの影響がある), 経験

主義者（実験を重視する実証主義の影響がある）、アルキメデス主義者（初期の作品から晩年の作品までアルキメデスの関連が認められる。特に「仮説からの推論」はアルキメデス『平面の平衡』や『浮体論』で用いられているものと同じもので、原理的な仮定を設け、それが厳密な数学的演繹を行うことを意味する）、ヘルメス主義者（反合理主義的視点に立つ）、等々である。青木靖三『天文対話』下、岩波文庫、1993年、293-295ページ（以後、青木『天文対話』と略記する）。伊藤俊太郎『ガリレオ』、人類の知的遺産、講談社、昭和59年、317-321ページ（以後、伊藤『ガリレオ』と略記する）。

- (8) 豊田利幸編、『ガリレオ』、世界の名著、中央公論社、昭和48年、77-118ページ。Galileo Galilei, *Dialogo sui Massimi sistemi tolemaico e Copernicano*, Milano, 1935, pp.20, 73-74, 122-123, 135-138 (IL. Northwestern University Library 所収)。Isaac Newton, *The Principia*, tran. by Andrew Motte, Prometheus Books, 1995, pp.12-14. Bertrand Russell, *op. cit.*, p.496. Max Born, *Die Relativitätstheorie Einsteins*, Springer, 2003. S.24-25, 30, 45-49, 57-60. (以後、Max Born と略記する)。Albert Einstein, *Relativity*, Barnes & Noble, New York, 2004, pp.9-11 (以後、Einstein, *Relativity* と略記する)。

特に、古典力学の相対性を把握する上で極めて参考になる文節として、世界の名著『ガリレオ』には 物理法則は互いに等速度で運動している二人の観察者に対して共通の形で表される、このことが現代物理学の根幹となった「相対性原理」である という行を見いだすし (118 ページ)、また Max Bron の *Die Relativitätstheorie Einsteins* には、運動法を因果的に把握する力学の法則は、ニュートンの絶対空間の中を一樣な直線運動をしている天体の総ての座標系について当てはまる (S.9, 66-68) という箇所があることを指摘しておく。

- (9) *En Torno a Galileo* については Coleccion 版を手にならず、Taurus 版を用いた (以後、Taurus VI と略記する)。講演録のうち第五講から第八講までを、『危機の図式 (Esquem de las crisis)』というタイトルで 1942 年に別に出版した (Taurus, VI, p.369)。
- (10) () は筆者挿入。Edmund Husserl, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die trnszendente Phänomenologie*, Martinus Nijhoff, Haag, 1954, S.20-32.
- (11) 伊藤『ガリレオ』、5 ページ。
- (12) Taurus VI, pp.371-372. 伊藤『ガリレオ』、3-7 ページ。
- (13) Wolfgang Pauli, *Theory of Relativity*, Trans. by G. Field, Dover Publications, New York, 1958. 訳 19, 189-197 (以後、W. Pauli と略記する)。Max Born, S.72-195.

- (14) 地方的という概念については、本稿Ⅱ，第2項目，2.「遠近法主義 (Perspectivism)」を参照政よ。
- (15) 前掲. リワノワ, 『リーマンとアインシュタインの世界』, 11, 33-37 ページ。Box Born, S.238, 287. W. Pauli, 83-96.
- (16) 拙著『スピノザ思想の原画分析』第四版, 政光プリプラン, 2008 年, 121, 150, 188, 196, 217 ページ。C. Gebhardt, Tractatus de Intellectus Emendatione, Heidelberg, 1972, p.39. Ethica, I. def.5, 6., prop.7, 8, 14-16, 18, 19, 24, 25., II. prop.45.
- (17) Max Born, S.172-179, 184, 190-191. W. Pauli, pp.9-15, 22-24, 71-73, 134-135. Einstein, Relativity, pp.27-30, 42-45.
- (18) 一般にいう, 特殊相対性原理である。内山龍雄『相対性理論』, 岩波書店, 5-6 ページ。
- (19) ガウスが証明したように曲率の大きさは g_{11} , g_{12} , g_{22} によって表すことができる。Einstein, Relativity, pp.73-76. Max Born, S.276-281. W. Pauli, pp.41-48. 矢野健太郎『アインシュタイン』, 人類の知的遺産, 講談社, 昭和 53 年, 93-94 ページ。

Ⅳ エピローグ

- (1) 例えば, 『覚え書き』(1) 170 ページ, (2) 195 ページ, (3) 194 ページでとった態度である。
- (2) 例えば, 『覚え書き』(1) 180 ページ, (2) 209 ページ, (3) 176 ページ, 181, 196 ページ, (4) 167 ページ, (5) 176 ページを参照せよ。
- (3) Colección 17, p.25.
- (4) Colección 17, p.21.